

かもしか

木
置
お
る
総
明
郷



1985/7

かもしか川柳社

第四回青森県こども川柳まつり

とき 七月二十八日(日) 午前十時
会場 蟹田町コミュニティセンター
宿題と選者 各題三句
「蟹」 蟹田 松尾 喬介
「夏休み」 青森 福井 柳 沙
「海」 川内 相馬 藤花
「自由題」 弘前 工藤 寿久
会費 三〇〇円(昼食・発表誌など)
作置費 各題の特選句の中から再選した
優秀作品に賞品をさしあげます
学生賞 学年別の得点上位の方に賞品を
さしあげます。

事務局 東郡蟹田町中師 北野岸柳
主催 青森県こども川柳まつり実行委員会

後援
えんぴつの会
子鹿の会
小羊の会
ジュニアかもしかの会
おかじょうき川柳社
かもしか川柳社

渡辺銀雨川柳句碑建立募金

川柳すずむし吟社は、昭和十一年に結成されてから今年で五十年を迎えました。主幹の渡辺銀雨は喜寿を迎え、記念事業として、渡辺銀雨の句碑を建立することに決まりました。みなさまのご芳志をお寄せいただきますようお願い致します。

・一口一・〇〇〇円
・期限 昭和六十年八月三十一日
・建立地 四渡園広場(五城目登り口)
・碑文 雪国に生れて耐えることになれ
・送付先 018-17秋田県五城目町東磯ノ目町 菊池一竿方 事務局

・十口以上の大口寄付の方は、句碑の裏にご芳名を刻まさせていただきます。

川柳すずむし吟社
荒川 紫陽花 幸野谷 十全
今野 一城 田畑 伯史
越後 一蝶 猿田 寒坊
婦人会川柳クラブ
鍋谷 福枝
渡辺銀雨句碑建立準備委員会

かもしか七月号もくじ

第3回川柳Z賞特集

正賞	古谷 恭一	一
準賞	海地 大破	二
選後感	柴田 午朗	三
選後感	橋高 薫風	四
選後感	奥室 数市	五
選後感	時実 新子	六
選後感	片柳 哲郎	七
選後感	山村 祐	八
選後感	尾藤 三柳	九
選後感	寺尾 俊平	一〇
選後感	泉 淳夫	一一
選後感	杉野 草兵	一二
針葉樹林⑤	小野 公樹	一三
北の角笛⑥	小野 公樹	一四
かもしか集(191)	柏葉みのる	一五
一葉集⑨	三〇	一六
蒼玉抄(150)	三〇	一七
「菜の花を賣う妻の背の残雪よ」省悟	表四	一八
SENRYU・JYOHOU	表四	一九
表紙板画⑫	北野 岸柳	表一

第三回川柳Z賞

古谷恭一氏(高知)に栄冠

川柳Z賞選考委員会

第一次選考(各選考委員十人すいせん)

☆宮本 紗光 すいせん
・海地 大破・古谷 恭一・加藤 久子
・菊池俊太郎・山本忠次郎・堀田 三昌
・小菅 裕子・新井 笑葉・岩崎真里子
・加藤 正治

☆柏葉 みのる すいせん

・浜本 美茶・古谷 恭一・加藤 久子
・石川 重尾・海地 大破・佐藤 岳俊
・浜口 剛史・野沢 省悟・加藤 正治
・前川千賀子

☆小野 公樹 すいせん

・佐藤 幸子・野沢 省悟・山本忠次郎
・岩崎真里子・海地 大破・桑野 昴子
・桐越 千絵・加藤 久子・近江あきら
・細川 如水

☆西山 金悦 すいせん

・佐藤 幸子・渡辺 康子・加藤 正治
・市川つとむ・小菅 裕子・沢田 清敏

・梶田 三昌・佐藤 岳俊・神谷三八朗
・松村 育子

☆工藤 寿久 すいせん

・加藤 正治・神谷三八朗・野沢 省悟
・前川千賀子・加藤 久子・菊池俊太郎
・浜本 美茶・山本忠次郎・佐藤 幸子
・桑野 昴子

☆高田 寄生木 すいせん

・沢田 清敏・加藤 正治・佐藤 岳俊
・海地 大破・古谷 恭一・山岸 童清
・田島 歳絵・岩崎真里子・岡田 千茶
・桑野 昴子

第二次選考(各選考委員五人すいせん)

★柴田 午朗 すいせん

①佐藤 岳俊②海地 大破③古谷 恭一④田島 歳絵⑤岡田 千茶

★橋高 薫風 すいせん
①古谷 恭一②前川千賀子③松村 育子④神谷三八朗⑤海地 大破

★奥室 数市 すいせん

①古谷 恭一②桑野 昴子③菊池俊太郎④渡辺 康子⑤小菅 裕子

★時実 新子 すいせん

①海地 大破②渡辺 康子③古谷 恭一④神谷三八朗⑤桑野 昴子

★片柳 哲郎 すいせん

①古谷 恭一②海地 大破③渡辺 康子④佐藤 幸子⑤松村 育子

★山村 祐 すいせん

①近江あきら②海地 大破③小菅 裕子④菊池俊太郎⑤桑野 昴子

★尾藤 三柳 すいせん

①神谷三八朗②桑野 昴子③野沢 省悟④加藤 久子⑤古谷 恭一

★寺尾 俊平 すいせん

①佐藤 岳俊②野沢 省悟③古谷 恭一④山本忠次郎⑤海地 大破

★泉 淳夫 すいせん

①野沢 省悟②古谷 恭一③山岸 童清④佐藤 岳俊⑤石川 重尾
★杉野 草兵 すいせん
①海地 大破②古谷 恭一③渡辺 康子④近江あきら⑤加藤 久子

第三回川柳Z賞 正賞作品

(賞金十万円・津軽塗桶)

高知市仁井田二三八六―二九

古 谷 恭 一

板の間を匍つてくるのは母の髪
 冬の月 漉瓶に音す黒い父
 煮凝りを掬って父が老けはじめ
 父の椅子 鱗が光っているようだ
 みんな出かけて額縁が笑い出す
 唾して大きな手水鉢があり
 包茎はかなし鬼太鼓座員かなし
 雪礫 田中角栄まだ喋り
 てのひらで朱い椿の喋りすぎ
 昔むかし杵は鈍器になり損ね
 ぼた山が一つ放浪芸一つ
 頓狂な父の癪から綿が吹く
 菜の花の向うに立てる帰還兵
 兵隊は極楽鳥にただ見とれ
 月朧 草食獣はみな眠り
 枕木に少年の耳あつくする
 牛曳いて疑い深い老人よ

許せない男 スルメを囓んでいる
 捨て印に疑惑が生れ 火蛾の下
 慰藉料を下さい鳥あげは来る
 破れ傘 何かに酔っていなれば
 ひまわりに溺れて妻がいなくなる
 雨合羽むんずと闇へひき戻す
 それは遠いジャックナイフの照り返し
 バリカンは錆びて八月十五日
 ふつくらと飯盛る死者の奢りかな
 花びらを千切り尽して千手仏
 銃口に花を挿したりして遊ぶ
 さてもさても馬の男根ひからびる
 馬のつらブラックリストから外す
 さらば友 木の股に湧く雲ならん
 梅干しが一個 軍艦マーチ過ぐ
 軍艦が見える鮫鱈鍋つつく
 どこまでも碧くかなしい降下兵

機関銃掃射が止んだ鱸雲
 鱸雲 はぐれた雲の数知れず
 盃に鬪魚の挽ねる音がする
 満月にこの全身の剛毛や
 ゆっくりと開く月夜の格納庫
 曼珠沙華刎ねる蘇生をせぬように
 ざわざわと森が騒いで樞行く
 キツキのやがて柩は穴だらけ
 オーロラが降りて柩を包み込む
 人間に降霊祭の明るさよ
 眷族の大皿小皿踊り出す
 頭上には石榴が一つ審判凶
 天井が落ちてくるぞと仁王立ち
 菩提樹に凭れて そこな銀河系
 少年の間にぐにやりと縄梯子
 革命はまぼろしだった鶴の国

第三回川柳Z賞 準賞作品

(賞金一万円)

土佐市高岡町犬の場

海 地 大 破

春の壁さあ落書をはじめよう
 橋のたもとのおいたぎ食の色ざんげ
 歯ぐきから血がにじみ出る猿多居
 人間臭い軍手が岸に流れつく
 暁の僧白人は獣の中
 傾斜する町の目玉をとりはずす
 完全主義者の目の中にあるトマトの朱
 篝火に鬼を演じるのは鬼か
 蟻塚のてっぺんにある虚しい旗
 水嵩の八月九月恨み節
 手のうちを晒し神さま仏さま
 半身麻痺の野の果てまでも灯をともす
 雨だれをじっと見ている脳軟化
 新芽を摘んでたましいが病んでいる
 ちちははと相似の手足ほろびの血
 雑草を分け入っていくけだるい血
 血廻しの血から薄い血がこぼれ

魚の目のさむい系譜を語り継ぐ
 糸累はひとりもない砂時計
 夜の深さをさまよいつづけ鳥になる
 縄抜けの縄がいったばん灰になる
 ふるさとの屋根に敵意をもっている
 ひまわりの暗部をのぞく放浪者
 青い茶碗とどこまで歩く放浪や
 放浪の帽子に芽吹くものがあり
 旅の終りの春の小血を買い足しぬ
 樹の上に還って行った猫一族
 雪が来てたましいはじく音がする
 駐車場から父のめまいがはじまった
 音もなく父の駅舎が崩れるか
 表札の裏から父が風化する
 ははの写経と父の自画像呑みこむ冬
 水漬をたらしこの頃いくじなし
 とむらい酒にしたたか酔ってしまいいけり

偽夫婦もそもそと飯終る
 老残を晒す男の岸づたい
 動かないワニと一日敗北者
 汗を出し切った男に影もどる
 とうせんばされた記憶の血がさわぐ
 晩年の面ふところに花まつり
 箱を開けるとボクの忌日が書いてある
 魚のわた人間のわた私の忌
 赤トンボ脳病院が痛みだす
 人体凶にからめとられる冬の雨
 黄昏の鴉が止まるあばら骨
 はらわたを晒すけもの匂いかな
 背泳の死体を担ぐ世原
 死者を曳くゆっくりと曳く日暮道
 一念の酒がゆらゆら立ち上がる
 ドラム罐の位置をすらして春を待つ

第三回川柳Z賞秀逸

① (作品50句より)

岩手県

佐藤 岳俊

継げるものひとつ吹雪の夜も生れ
 田圃死ぬ日本の農夫ひとり死ぬ
 野仏にごはんをあげて満ち足りる
 休田の角にちいさい餓死供養
 神棚で笑う煤けた祖母の顔
 いくたびも畦に咲き散る彼岸花
 休田に咲く花の群れ農の首
 地吹雪の刺さる両足抱いて眠る
 冬の木にもうわずくまる唾の神
 葉に鎌刺してちいさい村を去る
 雪おろし十偶の顔をそのままに
 鳥の巣をのぞく夫婦の火をのぞく
 老父の背の畦ゆっくりと越えていく

大根の花ひっそりと豊受胎
 北風が刺さりころのナイフ光る
 薪割って割って根雪に刺す炎
 豊満な十偶よ性器までさらす
 いくたびも畦に咲き散る彼岸花
 縄文の闇ふかぶかと吸うおんな
 自画像も逆さにうつる井戸の水
 てぶくろに隠す夫婦の火焰十器
 宵闇で積むくだかれた十器破片
 葉焼いて焼いてみごとな土まんじゅう
 脱糞の音も淋しい風の中
 瘦せた田にごろりころがる農の首
 枯れきった野に生き生きと麦の芽よ

十偶の目とおい母系の闇へぬけ
 頬冠り飢えた風たけつき刺さり
 葉灰に夫婦の影もとけていく
 積る雪みごとに二進法くだけ
 鴉だけ泣ける根雪へ農夫の死
 合掌のまま崩れたす給馬の家
 いつの日か土葬のままで眠りたい
 杉の葉の炎夕餉の喉に照り
 開墾の道道に立つ鬼の面
 満たす血の中一匹の田螺這う
 歯きしりがつづくちいさい闇の部屋
 孕む穂を刈れと墮胎の国がある
 除雪する背中ピテカントロプスよ

第三回川柳Z賞秀逸

②

(作品50句より)

青森市

野沢 省悟

菜の花と一緒に燃えるラブレター
 燃える血があれば十筆の伸びる音
 子の瞳からきらめくものを糧とする
 水を飲むひととき背巾透きこえる
 牛乳をあたたためている妻の髪

溶けるならわが静脈の魚よ泳げ
 氷塊やなすべきことのなき日かな
 地に還すものなし両の掌を洗う
 目覚むれば熱砂の如き敷布団
 純白の目隠しをされ朝になる

兎の瞳はつれて久しわが両掌
 某日のわが夏帽にたまる飢え
 紙の魚干作り燃やす夕暮れ
 にきびつぶして星の一個がこわれた指
 崩れんとして花火一本たりし指

子は夜の奥の寒さに眠りけり
 雨の日は五尺六寸水溜り
 粗か布団か一夜を生きのびる
 あれは翼を食べている昨日の私
 明日の砂丘を一夜の眠りから創る
 されば波頭で魚一匹は風となる
 陽たまりで子は父の手を食べつづけろ
 夫婦愛されど井戸から湧かぬ水

じゃがいもの皮をむいてる極悪人
 真昼野に一本の矢が朽ち果てる
 こぼれ萩宇くじ買うわが分身
 子に悪を見つけたときの芒原
 鬼灯と無明長夜を語り合う
 半身の落丁が棲む秋の残照
 子が千切るトンボの羽は僕の羽
 生き生きて枯葉枯葉なお枯葉

子が眠る時雨るる日の父を捨て
 真白きは真白きままに靴の跡
 台所のひと隅にある枯野原
 くらびるをひととき許す風花よ
 くるぶしを割ると霰が降って来る
 氷雨降る喉の渴きは癒えずして
 冬の青空わが平面の姿舞う
 白い十字架一日黙し雪を切る

第三回川柳Z賞秀逸

③

(作品50句より)

町田市

渡辺 康子

バスが来る一期一会の晴天よ
 しゃぶしゃぶ鍋男を揺する女を揺する
 あたたかい毬を投げられ鱗はらはら
 確かめてみようとすれば遠のく灯
 絵ロソク危ない想い点し居る
 雑念を抱いたまま出る寺の門
 歲月や いつか火がつく油鍋
 月煌々夜道を急ぐ火の手紙
 名指ししてから激痛の指となる
 眠らせてくれるところを探す鬼
 駅へ駅へわたしの黒い血が急かす
 城主は留守でカクテルの味少しずつ
 火を汲みにきものは白くしろく着る

揚羽蝶一途に冥府まで行かん
 抱かれて闇夜の彩を刻印す
 三百六十五日ひとりへ笛を吹き続け
 太陽が強い他人の貌で居る
 わがままな人差し指はいくさ好き
 ひらひらと沼に沈んでゆく手紙
 つぶやきを逃がして夜の換気扇
 街をゆく衾に積もるは白い時間
 三日後も胃に貼りついてる磯
 百夜待つ目殺エレジーが洩れる
 憎しみを洗い続けている霖雨
 濃い血黒い血嫌われに行く道化
 襖絵におんな真昼の沼を見ている

一步ひく恋よ桜のうすい彩
 用意したスープが冷めてゆくばかり
 指先の紐をたどってゆくと冬
 ちろちろ終わってないものがある
 風が止む辻に置かれたネガの束
 アルバムの中からポロリ欠けた十器
 売り切れの絵本を探す昏い森
 ひいふうみい実らぬ花を数える夜
 独りぼち肺の中まで入り込む霧
 再会や芯に触れずに風を見ている
 遠雷に要らなくなった面を捨て
 小指に降った雪を忘れておりません
 美しくたどることなど捨てた足

第三回川柳Z賞秀逸

④

(作品50句より)

東京都

神谷三八朗

空転のまた面白し無明の闇
冬帽子血縁つすき風とゆく
傘のしずくの一つの想い一つの畏
無蓋車にきつちり積んだ私生活
袋小路きつと何かが煮えている
裏切りに都合の悪い窓の位置
北の窓からていねいに来る密生者
その中の一つは解る茹玉子
墓掘りに頼まれてゆく握りめし
風を味方に今日も馬鹿気た手を叩く
暗転や男に明日を訊くまいぞ
パンの耳からきつと崩れる時刻表
旗捲いて風の柩を見送らむ

聖歌流れて遮断機は降りそね
迎え討つには少々し足らぬ皿の数
その裏で一点は取るドラマ
ハンカチは白より持たぬ逃亡者
人を許す指は一本ずつ鳴らす
風と雪と 男も妥協案を出す
横顔が好きでリングを剥いてもらう
朝のおもいのいろいろに目割菜の青さ
鎮魂歌 森も林も誰も居ぬ
夫婦には少し多目な茄子の花
すでに眠りし地蔵の鼻の丸さなど
極楽の話に飽いた豆売り婆
墓掘りを生業にして猫を飼う

一番鶏と四つには組まぬ父の戯画
人ら来て討たれ語りに夜を更す
山はまた与作名儀のままの私
日照り雨男も想うことがある
壁の帽子に灯が届かないそれでよい
指と戯れ喜怒哀楽の譜にうとし
風やんで生涯母は水びたし
証拠品の軍手は水に漬けてある
北の窓から証人台がよく見える
この真実を見よ千し魚の塩加減
愛の構図の周辺におく缶ジュース
落丁の女一つ気に妊りぬ
愛ひとつ生者の列の整然と

第三回川柳Z賞秀逸

④

(作品50句より)

札幌市

桑野晶子

旅は道つれ暗誦番号ふところに
石勝線ほあーと葉の馬馳ける
さくらさくら屋根の水脈西鶴ながれ
髪焦げる匂いラッシュの玩具箱
飽食の空小奴とカラスと歩く

一人百首 少年の蟹太らせる
いと底を洗うあしたは万愚節
ドーナツの穴から覗く禁獵区
おぼろ夜のうす口醬油 夫婦の全景
ひとひらの感情さんまぶつ切りに

大漁旗点となりカレーの口臭
母性本能かなしいものが吹きこぼれ
どの花も恵方を向いて穏やかな
じゃがいもの花と流れて海は臨月
ふるふき大根のやさしさで首輪る

単身赴任蛙一切の情死かな
干がれの骨殉教のごと眠る
母に似てくるかお洗うても指洗うても
子守唄ひもよく母の美術館
胸板をこぼれる多感なビスケット
取って置きの白桃もがれる母の村
子離れの掬わり箸割るように
滑走路子の蟬殻がまたぬくい

颱風北上仏のめしが冷えてくる
海荒れて枯梗も薔薇も目よりはぐれ
落日に約束がある襤褸の指
地獄絵の茄子もたしかなむらさきで
輪廻たぐれば菊人形に叫んでしまっ
柿を剥くてのひら茶飯事遠ざけて
山に雪降るじゅげむじゅげむの乳房ふる
枯野盛装 グラスの底の江差追分

霧晴れて性感帯のゆるい坂
柳葉魚焼く雪の情話が反り返る
一握りの塩と仏と沈まんか
樹氷満開冬の思想で立ち上がる
生者必滅きり岸に盾かご一個
かなしみの高さで近づく一輪車
シーツ真白 如意棒のない時間
魚への好きな帽子が褪せてゆく

第四回川柳Z賞作品募集ごあんない

作品自由 吟 三十句 六組
未発表。または、昭和六十年以降
の作品に限ります。

用紙 B4判(週刊誌見開き大) 原稿紙
賞 正賞 一名 十万円
準賞 若干名 一万円

第一次選考委員(県内)
秀逸 若干名 千円(図書券)

宮本 紗光 柏葉 みのる
小野 公樹 工藤 寿久
西山 金悦 高田 寄生末

第二次選考委員(全国)
尾藤 三柳 (東京都)
山村 祐 (東京都)

片柳 哲郎 (横浜市)
奥室 数市 (町田市)
橘 高 薫風 (豊中市)

時実 新子 (姫路市)
寺尾 俊平 (岡山市)
柴田 午朗 (島根県)

泉 淳夫 (福岡県)
杉野 草兵 (青森県)

締切り 昭和六十一年一月三十一日消印
参加料 不要。発表誌は60円切手15枚封入
備考 一定の推せんに満たないときは、
正賞を見送ることもあります。

他薦は、本人の了解を得て下さい。
送付先 青森県下北郡川内町浦町二九四
高田寄生末(〒039-52)

川柳Z賞選考委員会事務局

選考のあとに
正賞 33点 古谷 恭一(高知)
準賞 26点 海地 大破(土佐)

秀逸 14点 佐藤 岳俊(岩手)
秀逸 13点 野沢 省悟(青森)

秀逸 12点 渡辺 康子(町田)
秀逸 10点 神谷 三八朗(東京)

秀逸 10点 桑野 晶子(札幌)
佳作 8点 近江あきら

5点 田島 歳絵 菊池俊太郎
4点 松村 育子 前川千賀子
3点 小菅 裕子
3点 加藤 久子 山岸 竜清

2点 佐藤 幸子 山本忠次郎
1点 岡田 千茶 石川 重尾

第二次採点①6点②4点③3点④2点⑤1点

第三回川柳Z賞・佳作(50句より)
東京都 近江 あきら

らくがきの天まで伸びる豆の蔓
腹の中見せているのは影法師
背伸びした指先で鳴く青い鳥
酔ってふと故郷を描く老いた鬼
童話本まだめくってる斬られた手
魂に銭の形の傷がある
併走の鬼が陽気になってくる
処刑台に浮かれる新しい背広
鋭い鼻で上司の腐肉嗅ぎ分ける
疵跡を誇る男の道化面
百日は泣き百日は強い母
うっかりと胸を叩いた酒の席
昼間振る尻尾は妻も子も知らぬ
ゆっくりと仮面を洗う父の風呂
屋根の下廻り舞台はコミカルに
抜かれた骨の隙間から出す定期券
父の日の食卓飾る父の肉
足跡の中に小さな捨台詞
囃の兵の靴が見事に河に浮く
肋ら骨間夜の露店市で売る

第三回川柳Z賞・佳作(50句より)
市川市 田島 歳 絵

和事には遠くちりめんかばち炊く
じゅんさいの言葉で逃げる色事師
はやの香にむせて狂った日を想う
不透明な言葉で焼いた舌びらめ
香ばしく不倫をかくすチーズ焼
麻婆豆腐やがて崩れる妥協線
プチトマト踊り転げる六本木
砂肝よもう手に負えぬ子の謀叛
かたくなな情ビーマンに詰めて焼く
牛井と対角線の労働歌
迷う眼で季節を拾う松花堂
しゃぶしゃぶの箸に貴方のうす情
牛ロース筋切りをして禍根絶つ
ミディアムに焼けばよかった泣き女
ハンバーグ母の拇印をかくし切る
甘口の童画が語る一の重
二の重のまだ生ぐさき情話劇
ずっしりと母のぬくみの三の重
与の重のぼそぼそ語る国訛
禅寺の庫裡の歴史と鉄火味噌

第三回川柳Z賞・佳作(50句より)
東京都 菊池 俊太郎

高波に立ち向うステッキ一本
誰も声をかけない煙突の冷え
牛より深く深く土を嗅ぐ
ベタ足のボクサーに賭ける白夜
だっ広い礼拝堂の隅のにぎわい
何も見えぬ見晴らし台の人いきれ
自虐の果ての父のホームスチール
目分量で売られる雑魚のざわめき
おふくろが遺していった硬い風呂敷
童話を聞かせてくれる伴走者
生き返りそうな目刺しを急いで焼く
ばやっーと見えてくる舞台付きの檻
触診を拒む犬ころたちの意地
金属疲労を嗅ぐいつもの雑沓
いやらしい目付きで水鳥を見ている
海へ落ちる手筈のバスが満員だ
出来たての仏像という悪感
技巧派をおろおろさせるコンニャク団子
父を語る耳の中まで汗をかく
野外劇場にひとり夢のドリブル

第三回川柳Z賞・佳作(50句より)
大宮市 松村 育子

夢抱かな肌身に瑠璃の玉抱かな
愛憎の町がカーブの先にある
母と逢うはたまにがよろし石路の花
終の地か知らず此所にも公孫樹
好きになる前に嫌われようとする
巷から帰りめぐらす竹矢来
生きの世の諸処で風流譚に遇う
どの顔も苦衷を明かすには足らず
孤の部屋に雪は降り積む眠らねば
屈折の森で見ている寺の鷓尾
娘よ翔びなさい馬跳びの馬になる
指切りの指で終生紅を溶く
覚めた目で下手から見る恋地獄
歴史からこぼれて機を織りやまず
挫折を知らぬ男に思い届かない
生き変わり死にかわりして豆を煮る
罪一つ棚上げにして似非教徒
私の中の女が疼く稗種梅雨
本日晴天洗濯機から蝶あまた
その節は頼む美声なお寺さま

第三回川柳Z賞・佳作(50句より)
近江八幡市 前川 千賀子

仮の世の羽化急がねば冬が来る
思惟空転弥勒の指は頬にあり
雪しきり白の無限に殉じよう
冬の森笑い袋を吊るさんか
星形のところで女病んでいる
美しい思い出ばかり寒すぎて
一抜けて二抜けて寒の極まれり
編み棒のひと目ひと目の迷いごと
冬木立自問自答も呪わしき
果されぬ約束がある冬木立
万華鏡生あるものは昏れやすし
愛憎の埒外に咲く黄水仙
早春の飢餓白猫は夢を食む
桜前線少し鬱なるナルシスト
花の闇夜叉娘にあらず母にあらず
曇りのち移ろいやすきところかな
雲水の秘話淡彩で描かれる
それからは花を摘まない赤ずきん
わが胸の花野に根付く蛇母
有髪の尼僧にあらず黒揚げ羽

第三回川柳Z賞・佳作(50句より)
名古屋市 小管 裕子

踏んでふまれて四月の駅の帽子かな
遍路杖やがてゆきつく雛灯り
瓶逆立てて哀しいことをしてしまふ
陽春や大人のおむつ干してある
履歴書の裏白態の眠りかな
信じていたりする春風はやさしさを
牛肉屋の前で迷いがふっきれる
春の空げにうらうらと人が焼かれ
近似値のあたり一枚の舌がある
春の下流でメヌエール氏と出会う
善人の肋でまわる風見鶏
勝ちこしを言いかけても散るさくら
遮断機がやさしく上がる世迷いごと
葉桜のゆきもかえるも聞く遁辞
街は雨安い葉を買ってくる
つまりは家庭ろうそくを吹いて消す
夏のくる痛みで梅の実が熟す
フロントガラスの視界で消えてゆく動詞
やがて夫婦と柱の傷だけが残る
ほらふきがくれた時計がよく馴染む

第三回川柳Z賞・佳作(50句より)

岩沼市 加藤 久子

暗い暗い陽たまりをゆくオルゴール
空一面の嘘をみているがらんどろ
裏窓をひとつ作って女の絵
伝言板根雪一枚解けぬまま
他人はかりの街から旅に出たはがき
毒を少し吸ってみる裏窓
疑問符と昨日を回す洗濯機
少しづつ味方を綴じる観世縫り
春キャベツ女静かに氾濫す
朝刊が着く妻という梓のなか
終日を素数と話す白い部屋
カルチャーセンター小春日和の虫になる
からっぽの乳房を囲む症候群
青すぎる空から落ちてくる不倫
パーマ屋の方程式に騙される
古い情事を話しはじめるオルゴール
生臭い泥に喰われる土踏ます
またひとつハードルがある桜冷え
呼吸のあわなない細胞がひとつ
カラフルな渦のつべらぼう吐き出され

第三回川柳Z賞・佳作(50句より)

西宮市 山岸 竜清

僕は近視でケーキが哀しく見える
月白し闘ってゆく著二本
緩い手錠旅人たちに笛鳴りぬ
細胞や見知らぬ街で採血す
身代りのランブを擦る射程距離
日分量の飯を男らやがて炊き始む
馬鹿になる馬鹿な仮装行列が来る
さくらさくら少年の息する和綴本
愛よローソクがいつぱん溶けてゆく
逃げ場なき道化の影を掬うべし
極彩色の馬にもならず父にもならず
父の箒で父のこと塵に掃く
父郷怠慢 青いパイプが詰まっている
天声や無数の羅漢の中の父
父の素描と同じ道ゆく天道虫
雄鳥をこなして 地下鉄を出る父よ
仁王門はのぼると目を開けよ
匂のないトマト 少年武器を失いぬ
泥まみれ 金属音の少年たち
口ごもる少年 草矢を撃っている

第三回川柳Z賞・佳作(50句より)

東京都山本 忠次郎

ガチャんと閉じて炭坑の重い雲
反省をうながし続けてる裏山
棒杖にゴツゴツ当る根なし首
他人の中で固ってしまふ少年
太鼓の音で細々になる結晶
拒食症の戦車鉄の匂いがある
バケツ一杯の挽き肉になる浮かれ者
うつらうつら死神を待たす水の明るさ
これしきの憂鬱寸詰りの服の列
冬ざれて獄門首と獣の首
だれも居ない絵に入りたくなる
傷ついてこっそり獣のごとく眠る
機械音がする獣の傷口
涸れると形相が変わる僕の沼
くしゃくしゃの亡母の顔を引きのばす
乱数表みたいに陽気なグリーンピース
半睡のぼろぼろ落ちる道化の垢
トントン叩くと振り向く怖い夢
僕の夢を耕しているでんでん虫
春愁の木馬微熱を持ちつつけ

第三回川柳Z賞・佳作(50句より)

札幌市 佐藤 幸子

不器用な男と女のかくれんぼ
びったりと残高の合う竹の節
ひとりでは通れぬ薔薇のトンネルで
スケジュールがぎっしり停せな猫よ
恋わるるは身の隅隅の蛍なり
ソクラテスの妻になるとてならぬとて
井の中の蛙ほんとは泣き上手
チューリップひと冬無口だったぞな
誰が泪吸いつくしてや露のとう
少し戯けて春のささやきなど聴こう
一生を間違え通せ木瓜の花
身の丈を尺取虫に計られる
ガーベラは恋しい人の名を言えず
死の予感知らない振り押し通す
どこまでがアドリブだったと人が聞く
標的のひとつに男をぶらさげる
蹉かば母に告げなん一位の実
見えずいた世辞に一日救われる
大安吉日遺産抛棄の印を捺す
信じるといっとき軽い飯茶碗

第三回川柳Z賞・佳作(50句より)

岡山市 岡田 千茶

暗転のつぎは菜の花春景色
さくら造花でボン太の店も春のなか
春らんまん尻軽娘何処へ行く
筏師の積んでいるのは山桜
無限抱擁さくらはとうに葉桜に
葱坊主 姉の優しさには勝てぬ
さくらんぼ何でお前は男好き
樹の下で青い乳房を見てしま
桑の実よ 少年少女まだ他人
飄ひよと光りの中の山頭火
独り言伝言板も雨季に入る
雨に発つ ずるい男と雨おんな
鳥賊を干す一切は空鳥賊を干す
八月の花火おんなは火に誘う
夏が往く麦藁帽子置き去りに
絵画展眉濃きひとと後や先
満月の岬の目はお喋りで
人妻と三歩離れて秋の寺
握手だけ銀木犀に背を向けて
仇討に非ず芒ヶ原で向かい合う

第三回川柳Z賞・佳作(50句より)

静岡市石川 重尾

街は曇天 骨も曇天 鼻を研ぐ
ふるさとに母がいるから樹に登る
うたた寝の枕の下の修羅阿修羅
みんな空腹で石ばかり拾う
飄々と風 飄々と蟹の穴
ミンシ踏む 失うものは確かにある
札束を数え終ると喪の枕
月面へ一気に走る冬の馬
姐と闇の舞台に招かれる
橋ひとつ渡り終えては飯の種
神様が呉れた帽子と古時計
神様が斜めうしろのめくら蛇
神様と家族合せの迷い札
神様と墮ちて来たのは鬼の爪
札びらを切る冗談がきつすぎる
からくりの真ん中辺のさし首
舌は飽食 花瓶の水は枯れてゆく
沖には父の破船 少年の海点る
壁は孤独で昨日を喋り続ける

第一次通過作品十句抄(佳作以上除く)

愛知県 加藤 正治

生き甲斐は 死ぬ約束の外になし
春のいろ 雨の心が汲みとれぬ
裏切りをいつ許したか 手の凹み
他人の背 コピーで丸く画いておく
生いたちを語る 尻尾の長さだけ
逢うだけで罪になるなら 家を出る
憎まれてばかり居たくて 後ろ向く
雨だれや 長いざんげの箸袋
五本めも 数えてしまふ 罪の指
好きだった ことを形にして返す

弘前市 岩崎真里子

破局への模索ためこむ女のウエスト
抑圧を溜めたままです ゴムマリひとつ
哀しみの色や形や栗の実や
子の角を磨く母鬼になりきれず
ものさしの まん巾あたり 波騒ぐ
枝先に 冬と罪業がら下げる
ちちははの手の鳴る方へ足が向く
北の哲理か 猫背の猿が石になる

ちちははと書いてふる里 胸の奥
網膜に焼きつけ 農地 売りに出す
一宮市 沢田 清敏

人非人になろうと影を売り歩く
罪を数えると木魚が澄んでくる
世辞を並べられて何かを盗まれる
不都合な予想ばかりが掌に残る
時に自分を騙す仮面をふところに
いつの日かロボット愛が欲しくなる
無精卵かもしれない慕情をあたためる
花の鳴咽をまた聞き流す黒揚羽
陽動作戦としての焦点やもしれぬ
神様が賽を振るのを見せしめ

姫路市 梶田 三昌

人間に一番近いめし茶碗
だんだんと色のない絵が好きになる
山脈へ溶けこんでいく青い貨車
いくさから帰り新芽に触れてみる
目殺の右半分にある未来
雲の行方を証言台で考える
すこしずつ人間くさくなる手毬
嘘をつく枕の芯が重くなる
ポストまで歩く力があればよい
わたくしの首浮いている水たまり

旭川市 浜本 美茶

神よりも人を愛した人嫌い
青い灯をともし女の穿く木靴
ユダの樹のてっぺんにある懺悔録
悪人の骨の白さを見つめよう
キリストの骨の浮いているスープ皿
たましいの揺れを見ている霧の位置
深海に沈む十字架旨い魚
かなしみの壺かたむけて朝が来る
水あおく蒼くながれる修羅の底
相剋の氷河に透ける葦の骨

熊谷市 市川つとむ

千人を騙しひとりに騙される
恐山どこまでつづく蟻の列
化粧して女闘う 新月か
サンガラス男を裁く視野に咲く
生き様が似ている背なに会って冬
吐き出した言葉拾い歩く朝
なにもかも捨てて逃げたい風の彩
当然のことが恐くて鍵渡す
背を向けた男とおんな銃をとる
白桃は日向の匂い捨てて脱ぐ
名古屋市 浜口 剛史
めし粒のひとつひとつにあるいくさ

受賞のことば

古谷 恭一

二度目の挑戦で正賞を射ることができ、これほど嬉しいことはありません。しかし、このような大それた賞をもらった以上、今後の重任に耐えてゆけるかどうか、自分自身に不安を抱くことも確かです。まあ、今まで通りの愚直な創作を続けるしか方法はないだろうとは思いますが……。

幾千の道化と旅をしたことか
雑沓へ手を振る独りだと思ふ
郷関を出た彷徨の錆びた鈴
残像をつなぐと遠い鈴が鳴る
逃亡者 拒みつづけたものは何
死神よ執行猶予をくれないか
ペテン師がまた喝采を浴びている
手を握る裏切ることがないように
喝采の戯曲あざ笑うふところ手

北海道 桐越 千絵

首のない人形父の名を汚す
ローンクは燃えつき姑の緋ちりめん
昇天の掌からこぼれる銭の華
血の絆だんだん太くなる峠
北風に子の視野ひらく火打石
灰皿に男の海の荒れる日も
鏡の目どっこい生きてるチャップリン
右の男左の男も浪華節
灰皿にシャープな耳の損と得
墓地買って青いりんごの人嫌い
旭川市 新井 笑葉

沈黙の構図へ秘める含み針
エゴ少し鎮めて鳴らぬ父の笛
人真似の猿で虫歯が多くなる
青林檎喰う欲望の血を殖やす
口を封する 男 木目を塗り潰す
胎内の湖沼を黒い血が犯す
詰めこんだ嘘トランクが重くなる

神戸市 納谷 如水

母抱いて 想いが一つの冬果実
言葉のないまま生きる旅の野の草
送葬の一語に遅れる視線をもつ
多情仏心 欲に疲れている冬鴉
顔のない男が暮れの街から去る
あぶな絵に勝るといふ父の縄がある
語師つてさくさくとかじる冬リンゴ
悲を抱けば母の傘の中にいる
一途に攻める貧しい手が冬いち語
冬の岸 情けが渡る舟がない

受賞者の顔ぶれ

- ・ 第一回 57年 細川 不凍 (北海道)
- ・ 第二回 58年 酒谷 愛郷 (伊万里)
- ・ 第三回 59年 古谷 恭一 (高知)
- ・ 第四回 60年 あなたかもしれません。

幸い身近には、海地大破さんを中心とする木馬ぐるーぶの研鑽があり、自由な雰囲気
にひたって創作できるので、気儘な作品を生
むことができたのだと思います。生来、梓に
はまったり縛られたりすることが嫌いなので
伝統オンラインのグループに属していたら委縮
していたかも知れません。又それと並行して
「川柳展望」や今は中止された「川柳研究」
の「途上集」など、幾つかの自分を試すこと
ができる欄に、怖れ気もなく投じていったの
が、よい結果を招いたのだと思っています。
あくまで、梓の中に自分を押し込めるので
はなく、自分の梓を押しひろげてゆくことに
腐心しなければ、と思つ今頃です。
どうもありがとございました。

選 後 に

柴 田 午 朗

川柳と名付ける以上、単に短詩として優れているだけでなく、深く社会にかかわりのある句でなくてはならぬとおもつ。といつてもその素材の取上げ方が、おまりに日常的なもののみ流れ、諷刺や穿ちのみを狙うものであつてもなるまい。

また作品に詩の傾向を強める場合、その句語は鋭い感受性をもつものとなるから、ややもするとひとり合点に終る場合が多い。このことにも留意しなくてはならぬ。

そしてもう一つ。これは私の個人的な注文だが、作品にあまりむずかしい句語を使いたくない。誰にでも分る言葉で、ぐんぐん心の中にしみ入る詩がほしい。

こんなことを考えながら応募句を読んだが、川柳であるというよりも、新しいジャンルの中の短詩といたい作品に出逢つたりすると、私としては、やはり今一度川柳の原点に帰つてみることを必要を感じたりもした。佳句選は私自身の好みも加味して、次の五氏を推す結果となつた。

第一席 佐藤岳俊氏

自分が農村の生活者であるためかもしれないが、作品が農村を基盤に詠われているので共鳴度が高かった。川柳が社会詩である以上、農村の現実を冷静にみつめ、それを素材とした作品に迫力の生れるのは当然のことである。○積る雪みごとに二進法くだけ

第二席 海地大破氏

むづかしい句語が使われていないし、どう解釈していいか分らぬような句のないことに好感した。そして作品は現代社会に深くかわりをもつて、現実と遊離していない。なお他の応募句の中には、二つの句語を軽く組合せて構成し、作者の意図がどうにも分らぬというほどの作品もかなりあつたことは事実である。○ふるさとの屋根に敬意をもっている

第三席 古谷恭一氏

五十句を通読して、これは詩だな、と感じた。しかも素材として身近かなものを取上げているので、非常に親しいものに感じられる。

ボキヤブラリーの豊富・貧困

橘 高 薫 風

第三回川柳Z賞の選考をしながら、第二回

第二回に、その風土性の濃厚な、充実した作品を見せて下さった青森県下の作家諸氏が皆無であつたことに、非常な淋しさを感じた。佐藤岳俊氏が、岩手から、

除雪する背中ピテカントロプスよ

以下の作品を以つて重厚な風土を詠われているのみだった。豊かな風土性の作品を期待しているファンを淋しがらせないで欲しい。

今年の選考は、五十句をそれぞれ二点句、一点句、○点句に区別をし、その合計と、それにテーマのこなし具合を加点して、第一席から第五席までの順位を決めた。結果は、一句独立を尊ぶ私の見地から、テーマ作品は不利であつたようである。

第一席 古谷 恭一 作品

バリカンは錆びて八月十五日

銃口に花を挿したりして遊ぶ

革命はまぼろしだった鶴の国
など、批判もあそびも的確な作品から、

唾して大きな手水鉢があり

機関銃掃射が止んだ鱸雲

の感覚的把握の確かさに感銘を深くした。しかし、遊び心はいいがあそび過ぎ、感覚の鋭さはいいが、それに溺れた作品もあつたようだ。

第二席 前川 千賀子 作品

思惟空転弥勒の指は頬にあり
曇りのち移ろいやすきころかな

陶枕展覧者の夢と愚者の夢
亡き人と契らん鎌倉の一夜

この作者の作品は、よく出来たのとそうでないとの落差が非常に激しい。薄氷の上を歩くような心もとなさに一種の味があつた。言葉あそびをしない生真面目さを生かすと、まだまだ心情の敦さが作品に現れてくることだろつ。

第三席 神谷 三八朗 作品

その中の一つは解る如玉子

横顔が好きでリングを剥いてもらつ

夕刊を待つ朝刊を待つ自衛手段

作者とは、時折り川柳大会でお会いするの

やはり川柳である以上こうあるべきだと思つた。さればとて生まのままの素材をぶつつけている例が他の応募句にも多々あつたが、それは作者の詩情を濾過されたものでなくては、現代川柳とはいえないであらう。

○バリカンは錆びて八月十五日

第四席 田島歳絵氏

食膳に上る料理の一つ一つを素材としているので、はじめ私は何となく途まどつた。しかし確かに句は巧く、且つおもしろい。凡なる作者にあらず、敬意を表すべしと受取つた。世に食べものに興味のない人は少いが、こんな楽しい作品に出会つたのも久しぶりという気がする。

○麻婆豆腐やがて崩れる妥協線

第五席 岡田千茶氏

ここでもむづかしい句語は使われていないし、作品にロマンがあると感じた。句を読みながら、私は楽しい想像の世界に引きこまれた。

○桑の実よ少年少女また他人

だが、常に温顔で、四圍にはほのぼのとした爽やかな風が吹いている感じを受ける。高ぶらず、自らをいやしめずのお人柄だ。「句は人なり」と言つが、三八朗作品にはそれが一番濃厚に感じられる。

第四席 松村 育子 作品

好きになる前に嫌われようとする
指切りの指で終生紅を溶く

魚座からこぼれ地上の魚濁く

女流作家だけれど作品は重厚だ。自らの力量に溺れたと見える句が散見する。惜しい。

第五席 海地 大破 作品

とむらい酒にしたか酔つてしまいいけり
動かないワニと一日敗北者

句を仕立てる力は抜群だが、深刻さが空回りしていないか。全体にその傾向を感じたので、ここに挙げた明解な句に魅かれた。

次点

近江あきら、田島歳絵、岡田千茶、桑野

晶子諸氏の作品が第五席以下に続いた。

久良岐・剣花坊の川柳再興から八十年余現在の鋭諸氏の作品に、語彙の豊富さと貧困の画面を垣間見たように思える。
来年をまた期待したい。

寸感 — 女性作品の変貌をみて — 奥室 数市

今回のZ賞は女性柳人の台頭が目立った。昨今の川柳の傾向として、事としての社会へ対象の目を向けてゆくのではなくて、わずかな身の囲りの日常を物として促え、情感移入だけで書いているとしたら、男性より秀れた情感の持ち主である女性にはかなわないのである。そんな風潮の中で私の推した女性作家は、只感性が秀れているだけでなく、今まで希薄であった社会性(相手をハッキリ促え、どの様に向き合っているか)や諷刺の精神が見え初めてきたことである。

さくらさくら屋根の水脈西鶴ながら 晶子
おぼろ夜のうす口醬油 夫婦の全景 晶子
じゃがいもの花と流れて海は臨月 晶子
海荒れて桔梗も薔薇も目よりはぐれ 晶子
枯野盛装 グラスの底の江差追分 晶子
あたたかい毬を投げられ鱗はらはら 康子
襖絵におんな真昼の沼を見ている 康子
風が止む辻に置かれたネガの束 康子
アルバムの中からポロリ欠けた十器 康子
森を出る猿を待ってた太鼓テンツク 康子

陽春や大人のおむつ干してある 裕子
牛肉屋の前で迷いがふつきれる 裕子
つまりは家庭ろうそくを吹いて消す 裕子
ほらふきがくれた時計がよく馴染む 裕子
葬儀欠礼スパーにパンが溢れ 裕子
には、現代の女性の目を感じられ、一部の女性川柳の経験主義をコトバで美装する悪弊がない。しかし、50句連作ともなると、どの花も恵方を向いて穏やかな 晶子
可も不可もないというまい掘炬燵 晶子
雑念を抱いたまま出る寺の門 康子
用意したスープが冷めてゆくばかり 康子
成仏をしたい周遊券を買ってくる 裕子
一つずつ夢を潰して安楽死 裕子
のコトバの平和主義はいただけない。 久子
春キャベツ女静かに氾濫す 久子
直線に疲れて暖かい泥だ 久子
売れ残る性善説と天慈羅屋 千絵
ねずみ算笑いをたてて汽車走る 千絵
右の方と幸子作品にも注目したが、久子作品には観念の顔をのぞかせる個所があり、千

絵作品には、道学的と思える句が幾許もあり、幸子作品の花への思いは、歳時記における季へ寄せているように感じた。これだけについて言えば晶子作品の人类社会の方へ季の思い入れを寄せている句風との違いと解釈した。
恭一、俊太郎作品には、静寂の中で個をうたう中で雑踏へ足を踏み入れ、無理なく暗喩が作品化の前に消化されていることと、何よりも川柳の品格化向上という名目で失なわれていった笑いを、かなり質の高いレトリックを駆使して守っていることに好感をもった。
が、恭一作品の兵隊の非実感句は、単に悲しいメロデーに終っているし、俊太郎作品には連作の流れにぎこちないものを感じた。
大破作品は二次選のなかで、さすがに群を抜いてはいるが、大破作品の歩み方を見つめている私としては、前回よりはるかに作品が劣っているとみだし、「春の壁さあ落書をはじめよう」「ドラム罐の位置をずらして春を待つ」の冒頭を結句に、連作の流れを計算しての配置とみても、この西方に見られる淡々たる句風が、果してコトバの無駄な部分を除いたあとに来たものがどうか私の中で解決しない限り、あえて私の我儘で推せなかった。

個性こそ

海地大破作品を迷うことなく一位に推したのは、

雨だれをじっと見ている脳軟化
からひろがっていく思惟と視野が真実を見せ
てくれたからである。

正直言って、従来の大破作品のうまさには私は技巧だけを感じさせられてきた。今回の五十句もみごとにうまい。しかし、違つのである。彼の内在がこの一年にどう変化したか知るよしもないが、心と技が斯くも一致した川柳に出会えてまことにうれしい。

二位に推した渡辺康子作品には落差が目立つ。けれども類型川柳を見倦きた目に新鮮と映る作品が数多くあった。

あたたかい毬を投げられ鱗はらはら
ちろちろちろ終わっていかないものがある
決して新しい表現ではないのだが、この人の性来の感性が自然に現われたと見てよいだろう。素直に伸びられよ。

時実 新子

去年一位に推した貞恭一作品は自選がいささかズサンであったようだ。五十句おなじテーマを追う必要はないが、意志統一は欲しい。寄せ集めと見られては損である。しかしながらその個性やはり捨てがたい。
菜の花の向うに立てる帰還兵
革命はまぼろしだった鶴の国
ゆつくりと開く月夜の格納庫
などの佳作が多く、三位に推す所以である。

四位に推薦した神谷三八朗作品は評価の分れるところであらう。

傷心癒え難く孫の手など買って
人は喜劇とも言う折鶴の数という
壁の帽子に灯が届かないそれでよい

このとぼけた深み。初心時代の私ならおそろく見逃すか、立ち止まって真の底を感じ取る力がなかったであらうと思つた。

加齢はありがたい。面白うてやがてかなしきこの種の作品にしみじみと共鳴できるのだから。

さて五位に推すのは桑野晶子作品である。省略と飛躍とキラキラする「詩」(らしきものと敢えて言わせて頂く)にお手上げだった時代もある。リズムも私の呼吸には遠かった時代があった。

それが今回応募の五十句をくり返し読むほどに、惹かれるものが確かに出てきたのである。彼女がヨロイを脱いだのか、あまりにも調子のよい現川柳界の雪崩現象への反動か、とにかく桑野晶子作品から私はレモンの香を嗅いで爽やかになったことは事実である。坂道がつづく聖菓を切り分けて

さいごまで全作品の中のきらりと光る句が心に残った。それぞれに力作。
Z賞の企画実行委員の方々に御礼申しあげること次第である。

柳句集「学生日記」 杉野草兵 学生を對象として上梓した。始めて奥内三紙に広告を出したら、電話による問い合わせが多く、その反響に驚いている。改めて影響力の大きさに驚いている。(寄生木)

選 後 感

片 柳 哲 郎

与えられた50句発表の舞台を「課せられた」と考える人の句の並列には、鑑賞者を魅せてゆく流れが無い。鑑賞者が自ら立ち上ってその群作の中に入ってゆかねばならぬようでは感動体とは違うテクニクの積木の館を思わせる。鑑賞者は常に何かを求めている。志は高く、どこまでも高くもつものだと僕は文学鑑賞に対して思っているが、その高いものへの昇華の媒介として現代川柳の可能性を手離すことが出来ないでいる。

古谷さんの作品を読んで僕はこの作家の中に大河口を見た。これは昨年の同氏の作品と凡そ違った感慨であった。「言葉」の美しい扱い方に未元の図が散見したが、骨格のある真昼の画き方として賛成する。

海地さんの一連はそれに対してかなり技巧が勝って、時々それが踊り出す不満がある。美しい言葉で言えは、燃える名聲の平野」を行く感のある作品群とも言える。しかし作中に傀儡でない「人」の呼吸があった。これが最も大切なことだと思ふ。

50句の群作となると、川柳作家は息切れをおこす。そこに思惟の陥落を見せるのであるが、時として惨たる致命的な一句となつてその作家の本質を明らかにしてしまうこともある。Z賞は佳句の多少で決めるものではなく、その一連の作品の背後にある作家の姿(位置)を重視すべきものと考えている僕は、その致命的とも言ふ放り出された安易な一句二句を見てしまった時の心の落差は甚しい。

渡辺康子さんの作品には後背コレクシオンがある。そのコレクシオンからの発想が無理のない叙法で淡々と鑑賞者に迫ってくる。格別鋭利な刃もないが、拒否したいピエロの一踊りも僅少であった。しかしこの作家はこの儘でゆくと自分の周囲を一周した円から出られなくなりそうなる予感がする。

佐藤さんは奔放の泉をもっている作家だと思ふ。正に見事な(全応募作品中)でも最高作品と思ふような一句を書きなぐったかと思うと、致命的ではないが平易な句も散見する。然し傑出した句がこれをカバーしている。妙

選 後 感

山 村 祐

個々の作品の優劣をきめるのは比較的やさしい。しかし五〇句の作品群の優劣を定めるのは、それぞれのなかに佳作凡作が混在しているだけに困難を伴う。しかし昨年は酒宮愛郷氏を、今年には近江あきら氏の作品を一位へ推せんすることに躊躇を感じなかった。

選考に当って、第一次選考委員選出の千数百句をまず一読し、二読目はそれぞれの句のなかへ優と佳印をつけていった。最後に、作者毎に優と佳の作品の質と数とを比較しつつ、無印の作品の水準にも注意を払いながら、一位から五位までの順位を決めた。

一位。近江あきら氏作品。
童話本まためくって斬られた手
魂に銭の形の傷がある

ゆっくりと仮面を洗つ父の風呂
空想の鯨が瘡せる金魚鉢

妥協だとし屋の簞で書いてみる

他の作家の句のどこかに多かれ少かれ見受けける現代川柳の殻のようなものが比較的少いことに新鮮さを感じたことに加えて、全句の

質の水準の高いことにも注目した。この数年来私ごとなどの多忙による不勉強で、今までほとんど氏の作品に接しなかった自分を恥じた。

二位。海地大破氏作品。

傾斜する町の目玉をとりはずす
雨だれをじっと見ている脳軟化
偽夫婦もそもそもと飯終る

氏の作品については近く『川柳展望』へ作家論を書く予定故感想を省略させていたたく

三位。小菅裕子氏作品。

履歴書の裏白態の眠りかな
春の空げにうらうらと人が焼かれ
つまりは家庭ろつそくを吹いて消す

中京の作家と聞くが彼女の作品も今まで知らなかった。やや感傷が見え隠れするがナイヴなよき素質の持主である。

四位。菊地俊太郎氏作品。

生き返りそうなお刺しを急いで焼く
ほつたらかしの骨が海を渡ってくる
夢が欲しくて手拭いを首に巻く

に魅力を残す作品であった。

山村さんの作品群は桑野昴子さんのような鬼才系ではないが、平易な日時を一句一句丁寧に仕上げていく。創作と言つより川柳そのものに真剣になっているのが判る。

以上の5氏には勿論傑出した句が魅力的に一鑑賞者である僕を引きつけたのであるが、その他に、桑野昴子、加藤久子、野沢省悟、田島歳絵、神谷三八朗さんらの一連が最後まで順位決定に僕を迷わせた。野沢さんの句は一つの想の中で抒情的に誘いを見せたが、突如昇華し得ない露出言葉が飛びだし、想を犯してしまった。田島さんの遊びの精神はそれなりに面白く、器用にまとめて飽きさせなかったが、軽く流して読み物にした感がある。桑野さんはうまい作家だと思ふ。才が輝く作家と思ふ。今回の応募作品以上のものを発表し得る作家ではないかと推測している。神谷さんは句の組立てに特別な技法をもっているところが遂にその技法だけが結晶化してゆくを見た。これらの作家たちの今後を注目してゆきたいと思ふ。

氏の作品へまず言いたいことは、作品の良し悪しの落差がかなり烈しいことである。この点は今後の氏の課題ではないか(氏の諷刺的なユーモアの才能は高く評価しているし、作家に完成ということには無いのかもしれない)が

五位。桑野昴子氏作品。

柳葉魚焼く雪の情話が反り返る
山にじゅげむじゅげむの乳房ふる

五位は桑野作品か石川重尾作品か、について迷った。両者の才質は全く異なる。桑野作品はいかにも女性らしい情感のうしろに風土性も匂ってくるし、石川作品は現代川柳のよき伝統を正面から踏まえて男性的魅力がある。例えば氏の「顔上げて十指の隣間から墮ちる」などは独自の思考があつて捨て難い思ひだ。

断片的な句会作品でなく、五〇句まとめて読むとその作家の素質や課題が読みとれてくる。現代川柳を伝統的短詩としての社会的な認知を果すためには、このような試みなどによって、社会的なアピールが何よりも必要である。

したたかな文体

尾藤三柳

へ実存は本質に先立つ——これは、実存主義の根本命題である。この論法を藉りてへ映像はテーマに先立つつというのが、最近のすぐれた映画に対する私の感想だが、欧米のめざましい映像文化から承らく立ち遅れていた日本映画にもようやく新しい才能が登場、映像の自律化と想像力の解放が試られるようになった。これまで映画といえは、映像は、筋を売る、手段であり、テーマ(目的)に奉仕する道具であった。この関係が逆転して、映像(想像力)が独り歩きを始め、テーマがあとを追いかけるといった文体が現れてから、大衆娯楽の雄であった映画にも、難解の語が持ちこまれて、もうだいぶんになる。

現代川柳の場合も、似たことが言えるだろう。イマジネーションがテーマに拘束されると、表現はとかく観念的、図式的になり、時には説明的になる。表現がひたすらテーマに奉仕し、筋を売ることと専念した伝統的文体を踏襲する限り、川柳が古川柳以来の観念性から脱し、イマジネーションの自由な羽

搏きを獲得することはできない。そこで、命題的な口真似をもつひとつ。へ表現はテーマに先立つ

表現をテーマから解放し、イマジネーションの自律的な展開の中からテーマが導き出される——そんな作品は、どれほどか魅力的だろう。反面、テーマ優先の作品に馴らされた位置からは、当然、難解(この言い方は正しくないが)ということになる。

好みの作品がしばしば難解なものであるとはT・S・エリオットも言っているが、それが、新しさゆえの難解であつたら、むしろ愉しいであらう。新しさゆえ、というのは何ものをもつてしても、その魅力には抗したいという意味である。

二八点の予選通過作品には、いうまでもなくそれぞれに見るべきものがあつた。だが、何ものをもつてしても抗したいというほどの新しいおどろきや戦慄には、残念ながら出遭えなかつた。というより、どちらかといえは、作家おのおのが無難に帳尻を合わせた

Z賞の選衝を終えて

第三回川柳Z賞の選考を終了した。成績は別表のとおりである。

候補作品が前々回、前回とはほぼ同一の作家によってしめられている状態であつて、選考にはかなり神経を費した。

また、不凍、愛郷など既受賞者の作品のないのは至極不満であつた。なぜ出句しないのかよくわからん。もし、既受賞者がその権利を放棄することになると、Z賞そのものの本質が喪失してしまうことになりはしないかと心配するものである。不凍も愛郷もそして本年度の受賞者も、らい年は必ず出句してもらいたい。

さて作品の概評であるが、こうした賞に挑戦する作家たちは、概して硬質な表現をすることが多い。発想の段階から表現にいたるときに安易な妥協があるものと想定される。つまり、飾りつけるばかりのことばの乱用という無意味な羅列にすぎなくなる。

主題を生かし、作句を通して自分の思想や

寺尾俊平

思考を伝えなければ、これから先の川柳という広場は少しずつ汚れていくものと考えられる。

第一席の岳俊くんの作品は、東北の土の中にうごめくにんげんたちの姿が浮きでいて好感が持てた。

第二席の省悟くんの作品は、このところ思わせぶりな作品が少なくなつたのがうれしい。

第三席の恭一くんに、新しい表現への苦しみが見える。

第四席の忠次郎くんは、ここからさらに虚構というものを追うべきである。

第五席の大破くんは、句のうまさはバツグンであるが、やや散漫であつた。

他の候補作品として、真里子、笑葉、千賀子、昴子、千奈等々好作品が並んでいて、実は五人の入賞者との差はほとんどないといえる。

私は、作品から作家たちの存在感が伝わる

いう印象で、総体としては現代川柳のパターン化傾向が、ここでも避けがたく顔をのぞかせているのを垣間見る思いだつた。

さて、はじめに九点を選び、次いで五点に絞つた過程では、否応なく現時点でのトータルを規準とせざるを得なかつた。したがつて当該作品が川柳の将来にとつて、どれほどの展望と可能性を予感させるかという点については、多少とも疑問が残らないでもない。

神谷三八朗氏の一連は、自己の文体に対するかたくななまでの信頼から成り立っておりその文体は、年齢やキャリアを超えた独自の感性と下質のユーモアによく似合っている。

が、この似合い過ぎが、一句一句の個別的感動を全体の中に飽和させてしまふ結果にもなっている(無論、したたかさに変りはない)。

逆に、桑野昴子さんの場合は、きわめて新鮮な感動を呼ぶ単独作品がちりばめられているが、全体としては親疎相半ばして、魅力と不安が同居する印象を拭えなかつた。

以下、野沢省悟、加藤久子、古谷恭一氏とした順位らしきものも同じ理由によるが、違ふのは、砂漠で足跡を探すようなもどかしさを覚えたことである。

かどうかを重視する。ひとつ、らい年も諸君のすばらしい挑戦を期待して止まない。

らい年もそしてその次の年もZ賞があるということを楽しみにして、諸君の作句がより充実することを心から祈り、伝統は伝統のよさを、革新もまたその前進を期待。

泉 淳夫

- 第一席 野沢省悟(青森)
- 第二席 古谷恭一(高知)
- 第三席 山岸竜清(西宮)
- 第四席 佐藤岳俊(岩手)
- 第五席 石川重尾(静岡)

杉野草兵

- 第一席 海地大破(土佐)
- 第二席 古谷恭一(高知)
- 第三席 渡辺康子(町田)
- 第四席 近江あきら(東京)
- 第五席 加藤久子(岩沼)